特集

知床はいかにして世界遺産となったか

登録20年、至高の生態系

2025年は、知床（しれとこ）が世界自然遺産に登録されて20年の記念すべき年だ。大正時代に開拓が始まり、現在では漁業や観光業が盛んな知床では、さまざまな課題を乗り越え、今は野生動物との共存という難題に向き合っている。その軌跡はまさに地域の遺産であり、他地域への教えが詰まっている。知床は、歩みを止めない。

二つの運動

流氷がもたらす豊かな海の生態系と、原始性の高い陸の生態系とのつながりが評価されて、二〇〇五年（平成十七）、知床は世界自然遺産に登録された。川をサケが遡上（そじょう）し、そのサケをヒグマが食べたり、オオワシやオジロワシが魚を捕食したりして、海の栄養が陸へ運ばれる。

ではなぜ、流氷の海は豊かなのか。海水が凍る際に塩分等は凝縮されて氷の中に閉じ込められる。やがてそれは氷の下層から海の深部へと沈んでいく。入れ替わりに深部の栄養豊富な海水が浮上し、植物プランクトンを育む。また、海氷の下部には微細な藻類が増殖しており、氷が解ける際に海水中に放出されて、これもプランクトンの餌になる。こうした自然の摂理によって流氷の海には、プランクトンからシャチやクジラに至るまで、豊かな食物連鎖が形成されるのだ。知床が世界自然遺産に登録された年の流氷接岸初日が一月三十日だったことから、この日を「知床の日」として、世界遺産への思いを深めるため

（写真上）海藻が芽吹く早春の羅臼。左の雲のような塊は流氷。3月中旬撮影。写真提供＝新倉理希

文＝北室 かず子
写真＝田渕立幸

の多彩なイベントが行われる(※)。

知床の自然は、人間社会との相克の中で維持されてきた。ウトロ地域で農業開拓が始まったのは大正時代からだが、厳しい気候や交通の便の悪さなど、過酷な営農環境から昭和初期には岩尾別地区への入植者のほとんどが離農。その後も同じ場所への入植が試みられ、戦前のピーク時には岩尾別地区に六十戸もの農家があった。しかし、前述の自然環境、そして社会状況の変化によって昭和四十年代には全戸が離農した。一九六四年(昭和三十九)、国立公園に指定され、

1974年の森林。白く見えるところが開拓跡地。「しれとこ100平方メートル運動」は1977年に始まった。写真提供=斜里町

2014年の森林。土地を買い戻しては植林を進めた成果が明らかだ。土地買い戻しは2010年に完了した。土地買い戻しまでの運動参加者数は4万9,024人、寄付金額は5億2,253万円に達した。写真提供=斜里町

知床自然センターの奥にある「しれとこ100平方メートル運動ハウス」。2023年からは間伐された木を利用したモニュメントに寄付をした人の氏名が刻まれ、寄付者が増えるとモニュメントも増えていく。写真はハウス内で説明してくれた知床財団 企画総務部の米田紗衣さん。

「知床旅情」のヒットによる知床ブームや高度経済成長の世相と相まって、離農跡地が投機対象になる。当時の斜里町長・藤谷豊さんは事態を憂慮し、イギリスのナショナル・トラスト運動をヒントに、全国から寄付を募り離農跡地を買い取って保全することに踏み切った。名付けて「しれとこ100平方メートル運動」。百平方メートル八千円の寄付金を一口としたためだ。運動を伝える「しれとこ100平方メートル運動ハウス」には、寄付者の名前が保存されている。

一九八六年(昭和六十一)から翌年にかけての国有林伐採問題でも、知床に全国の注目が集まった。林野庁が林業経営のために十年間で約一万本を伐採する計画を発表すると、自然保護団体による反対運動が起きたのだ。北見営林支局は五百三十本の伐採を強行したが、直後の選挙で伐採計画の中止を訴えた保護派の午来昌さんが斜里町長に当選。その後、伐採計画は中止となった。これを契機に林野庁は、知床の国有林を原生的な自然生態系を保護する森にする方針転換をした。

知床国有林伐採計画で伐採予定とされていたミズナラの大木。

知床財団という星

一九八八年(昭和六十三)に斜里町が設立したのが知床財団だ。(公財)知床財団 理事長の村田良介さんはこう語る。「目的は三つありました。知床自然センター等の管理運営や野生鳥獣対策を通して国立公園の利用をコントロールすること。しれとこ100平方メートル運動の現地作業を担うこと。そしてこれらを実践する現地の専門集団として、環境省や北海道に行政とは異なる立場で積極的に提言をしていくことです。自然ガイドの概念が定着していなかった当時、専門的な知識を持った案内者による説明を始めたのも知床財団でした」。

●知床自然センター/斜里町大字遠音別村字岩宇別531 ☎0152・24・2114。9:00〜16:00(4月20日〜10月20日は8:00〜17:30、12月28日〜1月3日・12月毎週水曜休。入館無料。

(※)詳しくはP.10をご覧ください。

オーバーツーリズムへの対処も、知床財団がリードしている。「知床の来訪者はピーク時には年間約二百万人。これらの利用人数をコントロールすることで人の踏みつけから植生を守ることができ、野生鳥獣との軋轢（あつれき）も減らせます。数に頼って収益を確保する発想から、価値を正当に評価してもらって収益につなげる発想に転換しなければなりません。知床五湖の利用調整は成功事例で、ヒグマが活動する時期の森の中の道はガイド同行でのみ歩行を許可し、人数も制限しています。その一方、ヒグマの危険や植生への影響を回避し、誰でも歩けるバリアフリーの高架木道（こうかもくどう）を環境省が整備したのです。知床財団では、職員が猟銃を所持してヒグマを駆除することもあります。しかし知床では目撃・出没イコール駆除ではありません。ウトロでは現在、市街地全体や通学路を電気柵で囲うことで、共存のぎりぎりのラインを維持しています」と村田さん。

村田さんは世界自然遺産登録の時、斜里町環境保全課の職員だった。観光事業者との間で利用のコントロールや施設整備について、話し合いを重ねたことが印象深いと振り返る。

冬ならではの楽しみは、歩くスキーやスノーシューを使って、夏には行けない湿地や凍った湖面を歩き、断崖からオホーツク海の流氷を眺める「厳冬期の知床五湖エコツアー」（1月23日～3月23日実施）。冬期間、五湖へのアクセスは認定ガイドが同行する有料のエコツアーを通じてのみ許可されている。問い合わせ先／知床斜里町観光協会 ☎0152・22・2125
写真提供＝知床斜里町観光協会

知床五湖のうち一湖湖畔まで行くことができる高架木道は、無料でバリアフリー。4月下旬まで冬期閉鎖。写真提供＝知床斜里町観光協会

学校での「ヒグマ授業」や一般への「クマ端（ぼた）会議」などを行い、野生動物と共存する意識を醸成している。調査研究によって知床の価値を高め、生態系を守り、魅力や課題を発信する知床財団は、極北に輝く星のように知床を照らしている。

野生をマネジメントする

全国でクマの出没が問題になっているが、知床では二〇一六年（平成二十八）から野生動物との共存に関する専門職「ワイルドライフマネージャー」の養成が始まっている。（公財）知床自然大学院大学設立財団が行う知床ネイチャーキャンパスがそれだ。同財団 業務執行理事の中川元（なかがわはじめ）さんはこう語る。「知床では、長年、ヒグマの生態や行動を研究し、被害防止や安全対策、共存策を行ってきました。ヒグマの年間目撃件数はこの二十年で激増し、一昨年は二千件に上りましたが、知床では観光客や住民とヒグマの人身事故がありません。それは偶然ではなく、対策の賜物（たまもの）です。知床財団 野生動物対策チームの

ワイルドライフマネージャー養成に熱意を注ぐ中川さん。全国で頻発する野生動物と人との軋轢は、山林荒廃や耕作放棄地発生で緩衝地帯がなくなったことが原因と言う。斜里町立知床博物館学芸員、館長として世界遺産登録に尽力した。

観光客からソーセージを与えられたことがきっかけで人の食べ物の味を知り、市街地に出没するようになってしまった雌のヒグマ「ソーセージ」。知床財団の啓発カード「ソーセージの悲しい最後」は、人の無責任な行動が生む悲劇を訴える。

取り組みをはじめ、絶滅危惧種シマフクロウの保護、希少種のトドと漁業との共存、観光船と鳥類の関係など、すべてがワイルドマネージメントの対象です。世界自然遺産の地だからこそ学べることは多いのです」。学生のほか、自治体の野生動物対策担当者、環境省のレンジャー、NPO、自然ガイド、日本野鳥の会 職員など、全国から受講者が集まっている。

知床財団 羅臼（らうす）地区事業係長の坂部皆子（さかべみなこ）さんを知床羅臼ビジターセンターに訪ねた。坂部さんは世界遺産登録前から羅臼で勤務している。「世界遺産地域になるにあたり、漁業への制限に関する危惧をはじめ、いろいろなお考えがあったと思いますが、自然を守ることと、魚が獲れて漁業を続けられることは、本来は同じ方向を向いています。自然を知り、その価値を高めようとホエールウオッチングや流氷バードウオッチング、沿岸からヒグマを観察するベアーウオッチングも盛んになりました。昆布漁のない時期に漁師さん自身が船を出してガイドしておられます」。

羅臼町でもヒグマの出没が激増し、一昨年は駆除数が従来の最高

生物多様性とエゾシカ管理の実習でシカ柵を見学する知床ネイチャーキャンパスの受講生。写真提供＝知床自然大学院大学設立財団

知床財団オリジナルの熊除けの鈴「森の鈴」3,080円。

人気アウトドアメーカーとコラボしたトートバッグ4,950円。

知床羅臼ビジターセンター内で手描きイラストのカップで飲める知床財団パッケージのドリップコーヒー各400円。商品のみは309円。価格はすべて税込み。

1月28日～4月28日は知床の日 特別展示「海ワシ展」を開催。2月11日は館内で「カフェ湯ノ沢」が楽しめる。

●**知床羅臼ビジターセンター**／羅臼町湯ノ沢町6−27 ☎0153・87・2828。10:00～16:00（5月～10月は9:00～17:00）、月曜・12月23日～1月8日休。入館無料。

文化人類学を学んでいた北海道大学文学部在学中に訪れた知床羅臼ビジターセンターに惹かれて大学院環境科学研究科に進んだ坂部さん。知床では長年、オオワシ、オジロワシの生息調査を行ってきた。

値の倍近い七十頭を数えた。「これまでずっと戸外に魚を干してきて一度もヒグマに取られたことがなかったのに、なぜ干したらいけないのかと問う年配の方もおられます。人を恐れないヒグマが増えていることをご説明して、ご理解いただいています」。人里の味を知ることは、ヒグマにとっても人にとっても不幸なことなのだ。

さてこの特集に水中写真を提供していただいた新倉理希（にいくらりき）さんは、東京生まれの移住者だ。著名な水中写真家である関勝則（せきかつのり）さんが経営する（有）知床ダイビング企画で、インストラクターとして働いている。「羅臼の魅力は海中に四季があることです。陸上が極寒の二月に海藻は芽吹き始めて、一足早く春が来ます。流氷が解けるとプランクトンが大発生し稚魚があふれ、夏にはサケやマスが海域に戻ってきて、秋になると川を遡上し始めます」と声を弾ませる。一方、流氷の衰退、シロザケの減少を目の当たりにして環境変化に危機感を覚え、写真に残すことを使命だと考えているそうだ。

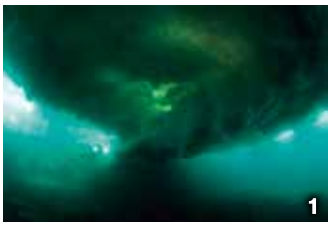
新倉さんは東海大学札幌キャンパスの海洋生物科学科で学び、在学中にダイビングのインストラクター資格を取得した。札幌市内のダイビングショップを経て、5年前に羅臼へ移住。

新倉さんは、漁師さんのパートナーでもある。「定置網が破れたり、船のプロペラが刺し網を巻いてしまったりしたら、僕らの出番です。潜って補修するんですよ」。新倉さんのまなざしは、世界遺産の海と漁業の実像をあるがままにとらえている。

中川さんは四十年以上、知床で野生生物の調査研究や保護に携わってきた。「問題はいつでもあったし、なんとか乗り越えても、また、新

定置網に入ったブリの群れを撮影しているところ。近年、サケの水揚げが低迷する一方、水温上昇によるものかブリの水揚げが増えている。写真提供＝新倉理希

タラバガニの若い個体の群れ。日中は集団、夜になると散って餌をとる。羅臼では冬から春にかけて、浅い水深でこうした群れが見られ、「カニ山」、「カニのピラミッド」と呼ばれている。



1.国後島との間を行きつ戻りつしながら重なり合う羅臼の流氷は、分厚く迫力あるのが特徴だとか。**2.**羅臼町内の河川を遡上するカラフトマス。近年、遡上数は著しく減っており、貴重な記録だ。**3.**天然ホタテが密集する海域にダイバーが潜って撮影した希少な写真。羅臼の前浜には天然貝が集まる水深約10mの海域がいくつかあり、潜水漁が行われている。写真提供すべて＝新倉理希

しい問題が次々に出てきます。それでも知床には、正解のない複雑な問題を解決していくための試行錯誤や合意形成の経験が蓄積されています」。世界が抱える問題の解決の場になりうる知床を、心強く誇らしく思った。それとともに知床で起きる問題は、私たちの社会のあり方と決して無関係ではないのだとも。世界自然遺産知床は、私たちに自然との付き合い方を問いかけ続けている。 Ⓙ

「世界自然遺産・知床の日」を祝おう！

1月30日の「知床の日」に札幌市内で開催される講演会をはじめ、各地でイベントが予定されている。●「知床の日 2025」イベント1/30知床世界自然遺産センター、●ランタン・イルミネーション点灯1/30道の駅うとろシリエトク、●周年記念パネル展1/29～1/30北海道庁、1/27～2/3北海道オホーツク総合振興局、1/29～2/3知床世界自然遺産センター、1/27～1/31北海道根室振興局、●知床ブックフェア1月下旬～2月上旬札幌市内書店など。 ※2024年12月18日時点の情報です。

写真提供＝知床斜里町観光協会